

く頭ずつかの馬と、たまに、いく台かのそりがそなえてあります。しかし、旅行者はたいいてい、めいめい、じぶんじぶんのそりをもっていて、ただ馬だけを駅で借りて、つきからつきへとわたっていくのです。駅の番人がいないばあいには、あたりの農民が馬へくらをおいてくれます。そしてやはり農民や、または、農家の男の子がいつしよにそりに乗ってきて、つぎの駅でもとの馬をひいてかえつてくれるわけです。これを駅夫とよんでいます。

この地方の住民たちは、きらきらした黄色い髪とすきとおるような、青い目と、おどろくばかりに白い、きれいな歯をもった、見るからに強健な人種でいずれも、寒気をふせぐために窓と戸口とを二重につけた、木造の小屋に住まっています。われわれから見れば、かんそというよりいじょうに、むしろいたいたしいくらい、物の不自由な生活なのですが、でも、みんなは、それでもつて、すっかりまんぞくしていて、なんのくつたくもないさまに、平和にみちてくらしています。冬中はそとの仕事がないので、みんなでひと間のたき火に集まり、女たちは糸をつむぎ機をおり、男たちは農具をつくろつたりしています。人間としては、まったく、このうえもなく、うぶなもので、わたしたちのような、ほんのとおりいっぺんの旅行者にたいしてもそれこそ親身のように親切をつくしてくれます。おそらく世界中に、こんなにじゅんじょうな

人種はまたとないだろうと思うほどです。

一一

ノルランドの旅行というと、いつもまつさきに、わたしの頭にうかぶのはあるかわいい一人の少年駅夫と、その子といっしょにくぐった雪中の暗夜の冒険です。

ある晩、そりに乗ってある村道を通っていきますと、ひよっこりと北の空に、とてもすばらしい極光（オーロラ）がでてきました。びつくりするほど、きらきらした、赤と青とのいくすじものするどい光の流れが、そつちこつちから、空いっぱいにふきあがり、それがおたがいにひじょうな速度でおっかけあつては地平線へおりおりするので、その壯観はとてことばでいいあらわすことはできません。いつしよに乗っている駅夫は、それをあおいで、

「ほう、大雪嵐がくるな。こんな光がたつと、あくる日は、きつと大嵐だ。」といいました。

その晩、予定の村にとまって、あくる朝おきでみますと、空はすっかり黒ずんだ雲でおもたくおおわれています。この地方では、日中というものがひじょうに短いのですが、きょうは、日中も、われわれの夕方どきのような、うすぐらさでした。しかし寒気はそうひどくもないの